りびんぐらいぶず　令和3（2021）年2月第2号

親鸞聖人御誕生八百五十年･立教改宗八百年のご消息及び称名破満釈に聞く

◆お名号のはたらきは、私たちによって受けとめられなければなりません。名号を聞く者に認識されなければなりません。そうでなければ宗教的象徴としての働きをもちません。聞こえて下さった名号を「本願招喚の勅命」と受けとめることこそ「信心」だったのです。

(Ref 石田慶和　本願寺出版社刊『これからの浄土真宗』p74)

◆はじめに

二０一九年一月九日に専如御門主による『御消息』が発布されました。『御消息』とは御門主のお手紙を意味します。この度の御消息は、親鸞聖人ご誕生八百五十年と立教開宗八百年をお迎えするに当っての門末へのお知らせです。

親鸞聖人は、承安三年（一一七三）にご誕生になりましたので八百五十年目は、二０二三年となります。今から二年先です。

また、聖人五十二歳の元仁元年（一二二四）は他力念仏のみ教えをおまとめになった『教行信証』ご執筆の草稿本成立年次たる立教開宗の御歳と定められており、八百年目は、二０二四年となります。三年先になります。

◆お名号の働きを受けとめ易くするお手立て

『御消息』には、「お釈迦様は、苦悩の私たちをそのままに救い、おさとりの真実へ導こうと願われたのが阿弥陀如来であると教えて下さいました」とあります。

「そして、親鸞聖人は、この阿弥陀如来の願い（ご本願）が、南無阿弥陀佛の**お念仏となって働き続けて下さっている**ことをあきらかにされたのです。」と教えて下さっています。

御消息にこの様に明確にして下さったことは、衆生にとり、名号認識の上で大変有り難いことです。

なぜなら、南無阿弥陀佛のお名号と表現するときにはそれがどのようにして働いていて下さるのかは凡夫にとって容易に認識し難いところ、衆生が本願力回向で賜ったお念

仏を称えれば衆生（私）の上で大行が働き出され直ちに聞こえて下さったものこそは如来様そのお方のお喚び声だったと受けとめること（聞名）は、方便法身の働きとして衆生が体験できる親しみ深い論理だったからです。

念の為、当時早速、K学寮に確認致しましたところ、御門主が認(したた)められた『御消息』が発布されるに当っては、K学寮も委員を構成される起草委員会が同意の上で発布（Ref『宗報』2019 年 9 月号 p2～）されたものであるとご回答戴いたのです。

これは『御消息』が発布される手続きプロセスについてのお応えですが、『御消息』に記載された本質的な要素「お念仏」の働きに同意されたものとして受けとめることができることは注目に値します。不肖が確認に及んだのはこの点に関します。

歴史的に第三代覚如上人が確立され、三業惑乱後に決着された御常教、より本質的には、戦後すぐ昭和二十一年に制定された宗制の許では、「南無阿弥陀佛のお念仏となって働き続けて下さっている」とお念仏を信心に優先して私共門末が云おうものなら、異安心であるとして許されない虞れが大だったからであります。

それ故、一月九日ご発布の専如御門主の『ご消息』は、御門主による伝道の戦略的方向性が明確化されたものと積極的に受けとめさせて戴くことができ、誠に有り難いことであります。

◆称名破満（しょうみょうはまん）釈に聞く

歎異抄を通じてわが人生をお聞かせに与ることを今年度の当院お聴聞の会の年間課題に掲げたご縁から、桜井鎔俊師の『歎異抄を読み解く』を拝読致しておりますと「行巻」に、行というものを説明した結論として、親鸞聖人が自ら施された四句の解釈が出て参りますとあります。教行信証「行の巻」の称名破満釈(註釈版聖典 p146)です

◆一、**称名は即ち是れ最勝真妙の正業なり。**これがその一であります。正業とは、正しい行為のことでありますから、人間行為の中で最も真実で純粋な行為であるということになります。行為という概念の中に言語も入れる事が仏教の通例です。「歎異抄」の末尾に「念仏のみぞまことにておはします」とまったく同じであります。

◆二、**正業は則ち是念仏なり。**

一般に称名も念仏も同じ言葉と解していますが、称名とは勿論、口に名を称えることです

が、念仏とは、元来、仏を念ずることで、口の行為でなく、意（こころ）の働きであります。念仏を信ずる人が、念仏を称える時には、口で称えながら、しかも意（こころ）で仏を念（おもっている）のであり、意念なくして口称するというのなら、鸚鵡か九官鳥の念仏になってしまいます。ですから正しい念仏という行為は意に仏を念う事を伴うものであることを云ったのが、第二句です。

◆三、念仏は則ち是れ南無阿弥陀佛なり。

　これは大変なことを言ったことになります。念仏とは仏を念ずるとか仏を念（おも）うとか仏を称えるとか、と云わねばならない筈だからです。

すると「念仏は念南無阿弥陀仏なり」とか、「念仏は称南無阿弥陀佛なり」とかいうべき筈のところを、その「念」「称」を省いて、単に「南無阿弥陀佛なり」と言ったのは、重大な意味があるのであります。

私達は、他人を訪問したり、訪問客に面接したりする場合は、普段着では失礼だという訳で、訪問用の衣服をまといます。阿弥陀仏は衆生に接触されるときは、必ず「御名」という訪問着姿になられるのです。されば、如来が「意念」として衆生の意識の中に働けば、「念佛」となり、「口称」として口で称えさせる働きを示されると「称名」となる。これによって思えば如来は「御名」の形で「私達の心を働かさせて、仏を念じさせ」「私達の口を働かさせて名を称えさせしめる」のですから、「心に仏を思う」は、思わさせしめられる」のであり、「口にみ名を称えるのは、称えさせしめられる」ので、その「させしめるもの」そのものを南無阿弥陀佛と言う。

であるから、「御名」こそ我らを救いたまう仏の本体で、これを図示すれば

「称名＝働く御名＝救済仏の本体」

と云うことになるのであります。この一句は、純粋他力のギリギリのところを表現した実に素晴らしい一句の解釈で、親鸞教学の真髄であります。合掌。

◆二月二七日十時半～　永代経兼前坊守十三回忌
◆三月七日（日）二十時～仏壮お聴聞の会
◆三月十六日（火）十九時半～仏婦お聴聞の会

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥